

告されている。

しかし抜釘を必要としない吸収性内固定材は整形外科にとって極めて魅力のある治療材であり、今後材質の更なる改良、合併症の解決によりその適応を広げ普及すべき治療法と思われる。

2) 腎細胞癌に対する nephron sparing surgery —フィブリングルーおよびアルゴンビーム モアキュレーターの利用—

富田 善彦・今井 智之
斉藤 和英・谷川 俊貴
武田 正之・高橋 公太 (新潟大学泌尿器科)

1993年11月より1995年3月の間に両側腎細胞癌5例(同時発生3例非同時性2例)に対し、nephron sparing surgeryを行った。同時発生の3例中2例には両側に、計7腎に対して行った。うち6腎は腎部分切除、1腎に腫瘍核出術を施行した。

術中超音波検査を行い satellite lesion のないことを確かめた後、腎茎部の露出、血流の遮断ののち、凍結 Lactate Ringer 液による腎の表面冷却を行った。疎血時間は20~78分、平均58分であった。腎の切断面に対しては原則として主要な血管断端のクロミックカットガットによる figure eight suture の後に argon beam coagulator での焼灼を行い、fibrin glue を塗布した。脂肪組織を切断面にあて、これをマットレス縫合にて固定し、少量の fibrin glue を縫合部に塗布した。1腎の手術後に尿漏を認めたが手術後に重篤な合併症はなく、腎機能も良好に温存された。

3) 血管外科領域で最近使用している人工材料 の諸問題

諸 久永・大関 一
渡辺 弘・斎藤 憲
山本 和男・名村 理
林 純一・江口 昭治 (新潟大学第二外科)

最近、コラーゲンもしくは、ゼラチンにより人工血管壁を浸潤させたものが開発され、良好な臨床結果を得ている。これらシールドグラフトの利点としては、1) 血管吻合後の人工血管壁からの血液の漏れが少なく、輸血量の軽減が得られる点、2) 血栓形成が少なく、内膜の新生が良好である点、3) 柔らかい素材であることから、人工血管と大動脈壁との適合性が良好である点、などが挙げられる。一方で、本グラフト使用により、術後の発熱、胸水貯留を認める例や術後のグラフト径の拡大を認

める例が存在する、などの幾つかの問題点が浮上してきた。また、人工血管移植部位から、グラフトの屈曲が生じやすい部位でのリング付きグラフトの使用や、グラフトサイズから、B-T シャント例のような適当なサイズの生体血管が得られにくい小児での小口径人工血管の使用があるが、用いたグラフト径の術後開存率の比較から、口径のより小さな人工血管の開存率は不良であった。さらに、大静脈系での使用では、人工血管のパッチ形成、リング付き人工血管置換による下大静脈再建後の早期開存性は良好であった。以上より、人工血管使用部位での開存性及び生体適合性を考慮したグラフトのサイズ、素材の選択が肝要である。また、最近のシールドグラフト使用例には、術後に発熱、胸水貯留、及びグラフト径の拡大を認めるものがあり、術後の注意深い観察が必要である。

4) 悪性胆道狭窄に対する Metallic Stent に よる内瘻化術の経験

伊達 和俊・塚田 一博
白井 良夫・内田 克之
黒崎 功・大竹 雅広
青野 高志・二瓶 幸栄
畠山 勝義 (新潟大学第一外科)

近年、手術不能閉塞性黄疸症例に対して減黄目的に経皮経肝胆道ドレナージ術が広く普及しており、ドレナージチューブを内瘻化した後、退院し家庭で生活する症例が増えてきた。しかし、チューブトラブル等の問題が多く、quality of life の点で問題が残るのが現状である。これに対し近年では Metallic Stent を挿入しチューブフリーとすることが可能となりまた、感染、逸脱が少ないといった利点も報告されてきた。当科においても、1993年2月より1995年5月までに胆嚢癌2例、胆管癌1例、胆管細胞癌2例のいずれも肝門部狭窄例に対し Metallic Stent の挿入をおこなった。内1例は2週間前に挿入し現在入院中、1例は挿入以前よりみられた胆管炎が改善することなく35日目にステント内に留置した外瘻チューブを抜去することなく死亡した。他3例は退院可能であった。内1例は現在外来通院中、2例は現在までに死亡している。死亡例の生存期間は80日と375日で、後者の自宅療養期間は308日でその間職場復帰している。同例は入院中に外照射と5FUの持続投与が施行されている。また、同例は右葉のみのドレナージで左葉はドレナージ不良であったにもかかわらず1年近く黄疸なく経過した。8カ月後のCTでは左葉は腫瘍に置き